
命の重さ

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命の重さ

【Nコード】

N6387T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

戦争で戦う子供たちのそれぞれ。

サイト、dノベ転載

怖がって震える唇。

紡がない言葉。

なぜ目の前にいる君は泣いているのか。

僕は知らない。わからない。

そこに樂園はなかった。

なぜ世界は戦うんだ……！

ただ僕の目の前には横たわる誰か。

僕はこんなこと、望んでいない。

私は、親を殺され、少年兵となった子供達を見た。

彼らは、その純粋な目で私を見ていた。

ある少年に私は話しかける。

私は、その少年のある言葉が印象的だった。

「人は殺せない」

その少年は、物心ついてから同じような少年兵のいる今の場所に
住み始めた。

訓練は受けたが、どうしても人は殺せなかった。

体がそれを拒否していた。

それでも、彼は相手を威嚇する術を知り、逃げる方法も知ってい
たから生きてこれた。

相手にケガをさせても、殺すことは少なかった。

少なかっただけ。殺さないでいられるはずがない。

でも少年は、誰かの悲しむ顔を見たくないから殺さない、と言う。

彼は人を見ると、その後ろにいる人達の顔が浮かんでくるようだとも言っていた。

「僕は五人殺した」

ある少年はこう言っていた。

だが、その口調は淡々としていた。

事務的に作業をこなしているような。

しかし、どこもなく悲しげな響きもあったように感じた。

そんな少年がいるかと思えば、嬉しそうに殺した人数を言う少年もいた。

昔、人は一人で生き、だんだんと協力ということを知るようになった。

その中で、私達は数々の過ちも犯してきた。

そうして生きてきた私達。

あの頃と、命の重さはどんな風が変わったのだろうか。

私と少年達の感じている命の重さは、どう違うのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6387t/>

命の重さ

2011年5月31日12時29分発行